

オイスカ海外研修員修了式・修了生謝辞

インドネシアのルルさん（研修科目：国際ボランティア研修）による謝辞をご紹介します。

この謝辞は、12月20日に東京都庁で開催した2000年オイスカ海外研修員修了式で、今回研修を修了した60名の修了生（フィジー、インドネシマレーシア、ミャンマー、パプアニューギニア、フィリピン、スリランカ、タイの8カ国）を代表したものです。

謝辞を述べたルルさんは今年27歳。4年前、愛知県のオイスカ中部研修センターで農業一般を研修、今回再び国際ボランティア研修生として来日し、2年間の研修を終えました。オイスカ研修センターに入所したのは1993年。それ以来7年間、研修生また現地スタッフとしてオイスカ活動に関わってきました。現地では研修生OB主導で立ち上げたチダフ研修センターのスタッフとして活躍し、帰国後も帰国研修生の中心となることを期待されています。

以下は謝辞の全文です

皆さんこんにちは。

今日はお忙しいところ私たちの修了式のためにご出席いただきありがとうございました。私はインドネシアのルルと申します。去年から四国研修センターで2年間ボランティア研修をさせていただきました。修了生を代表してスピーチをさせていただきます

まず始めにインドネシア人を代表して、東京の皆様にはお礼を申しあげなければなりません。インドネシア、中部ジャワにある「ボロブドゥール遺跡」は私たちにとって、大変大切な場所です。東京の皆様には、ボロブドゥールでの植林で大変お世話になりました。本当にありがとうございました。（担当注：オイスカ東京議員連合会とオイスカ都議会議員連盟が中心となって、2000年より5カ年計画で「ボロブドゥール遺跡 公園・環境整備植林」を現地からの要請に応じ開始、2000年7月に最初の植林を行なった）

さて、初めて日本に来た時4年前中部研修センターで1年間農業を勉強しました。今回はボランティア研修ですが、「ボランティア研修と言うのはどんな研修をしていますか」とよく聞かれました。と言う風に説明すればいいか時々困りました。どうしてかと言うとボランティア研修は範囲がとても広いからです。農業研修とか、家政研修とかは、はっきり分かりますがボランティア研修と言うのははっきり分かりません。でも2年間色々なことを勉強することが出来たのでとてもよかったと思います。事務所でパソコンの使い方を覚え、「四国だより」というセンターの広報誌を作り、また様々なところでスピーチをしたり、子供たちと交流をしたりしてPR活動をしました。オイスカのPR活動だけではなく農業の養鶏、日本の文化「生花、お茶、日本の料理、洋裁、編物」も勉強しました。

四国研修センターでは今年初めて女性生活改善研修のコースが始まりました。毎年修了式に来られている方は今年、ずいぶん女性の研修生が多いとお気づきのことかと思えます。四国センターに5ヶ国から、11名の女性が来ていたからです。女性生活改善コースが出来たことで女性が外国で研修を受ける機会が広がりました。今まで研修生はほとんど男性が対象でした。女性が海外に研修に出ることで女性の世界が広がり、国での女性の役割がもっと重要になると思えます。特に栄養学、保健衛生、食品加工の知識と技術を出身地域で普及させるには女性の力が必要です。

私の研修は2回目ですが、今回修了する研修生はほとんどがはじめての来日でした。研修した課目は様々ですが、日本で共通して学んだのはオイスカ精神だと思います。オイスカ精神を一言で説明するのはとてもできることではありませんが、例えば机の上で計画するだけでなく、リーダーが率先して働くことなどです。コツコツ働くことの大切さを学び、そうやって生きる多くの日本人を見て良かったと思います。また日本での研修は日本のことだけではなく様々な国から来

た研修生と生活するのでお互いの国について文化、習慣などを知る機会にもなり、理解する気持ちを養うことが出来ました。このことは国で体験する事はできません。

最近日本では若い青少年の犯罪が目立っています。青少年の犯罪が増えてくると国の未来はどうなるでしょうか。オイスカ活動はそういった問題を解決するためにも役割を担えると思います。私たちオイスカ研修生は日本で民間大使として子供たちと多くの交流の機会を持ちました。

その交流の中では「子供の森」計画などの環境教育、また農作業を通して「食べ物に感謝する気持ち」を伝えるために努力しました。また小さい頃から私たち外国人と交流を持つことで異文化を理解する「心の広い」人間に成長することを期待しています。「心の広い」人間はささいなことでも「キレル」こともないし、「いじめ」もしません。

また今私たち、イスラムの人たちは1カ月間断食をしています。断食と言うのは太陽が出る前から沈むまで食べたり飲んではいけません。これは色々な欲望を押さえると言う目的の他にお金や食べ物なくて苦しむ貧しい人たちの気持ちを共感すると言う目的があります。日本は豊かな国で輸入もして何でもありますがアフリカとアジアの国を見ればまだまだ食べることができない人がたくさんいます。食べ物がじゅうぶんありません、水がじゅうぶんありません。それらの人のことを考えて断食をして「ひもじい」思いをし、1カ月の最後の日にはボランティアをしなければなりません。イスラム寺院や、貧しい人たちにお金やお米などの寄付をしたりします。このボランティアをしなければ1カ月間の断食が意味がありません。

日本では宗教、とりわけイスラム教というとなんか「こわい」感じがするかもしれませんが、私たちにとって宗教は「教育」の一部でもあります。自分のためだけではなく、世界中のどこかにいる苦しんでいる人たちのために、何かを行動する。日本でもこういった精神的なことを何か子供たちに教えなければいけない気がします。

明日私はインドネシアに帰ります。帰国したら、中部センター、西日本センター、そして四国センターで研修した友だちと一緒にこのオイスカの精神を持って手をつなぎ、日本で学んだことを実践していきたいと思います。

今まで日本で一つのオイスカの屋根の下で色々な国から来た研修生と一緒に生活をし、厳しい修もあったと思います。言葉の違い、文化の違いで伝えたくても伝えられない事もたくさんありました。みんなたくさん私のことを我慢をしたことと思います。日本に来なければ良かったと思ったこともあるかもしれません。

しかし私たちは今日までがんばることができました。日本に来る前より、ずっと大きな人間になることができました。自分が変わった事を今はわからなくても国へ帰ったら、わかると思います。

明日もうみんな自分の国へ帰らなければなりません。帰りたくない気持ちもありますが自分の家族とずっと離れているのはつらいことです。

修了研修生の皆さん、国へ帰っても日本で学んだこと、日本で出来た友達を忘れないで下さい。今まで隣で寝起きしていた友達は遠い、遠い外国に帰ります。でもきっとまた会うことができます。オイスカのそばにいる限りいつか会うことが出来ると思います。帰ってから家の事情でオイスカの仕事を続けられない修了生もいると思いますが、オイスカに行けばいつでも、すぐにオイスカファミリーになれます。みなさん、がんばってください。

最後になりましたが中野総裁をはじめオイスカのメンバーの皆さんのおかげで私たち研修生が日本で研修することが出来ました。この感謝の気持ちはとても言葉では言い表せません。帰国し、それぞれの立場でオイスカ活動を発展させることにより私たちの気持ちを目に見える形にしています。どうもありがとうございました。

簡単ではございますが、以上で修了のあいさつに代えさせていただきます。